

村上 弥生

「土佐紙業の恩人」没後100年

紙を漉く時に必ず用いられるものは、「ノリ」または「フノリ」と言われるもの。「日本製紙論」での説明は、その粘りの性質を利用して、槽の中で紙原料が均等に浮遊するようにし、また、漉き上げた時の水の漏れる速さを調整する役目を果たすとされている。

最も良いのが、ユキノシタ科のノリウツギの木の皮からとるタヅノリで、その次がアオイ科のトロロアオイという草の根からとるキョウフノリといわれるものとされる。

ただ、これらは非常に腐敗しやすく、気温が高い時にはその粘性を減少させてしまう。特に土佐のように炎熱はなほだしいところではノリの効力を消失して非常な困難に陥ることがある



球状のつぼみが特徴の玉紫陽花
(6月下旬、県立牧野植物園)

と、実感がこもった書き方をしている。昔はこれを悪魔のせいだとして、神官や僧侶に御祓いや祈禱をしてもらうというようなことが

あったが、今日では学問上の理論を学ぶべきだとしてい

る。源太は明治二十二(一八八九)年にノリウツギを乾燥品として輸送する案を出したり、これを産出するところへ、腐敗させずに送る方法を説明したりしている。しかし不足を補えるほどの効果はなかったようだ。防腐剤が日本で製造されるのは大正時代以後のことになる。

ノリになる他の植物を探すことも怠らなかった。そうして見つけたのがアオギリの木だった。これは同十八(一八八五)年に勸業月報で一度報告したが、あまり受け入れられなかったらしい。

四年後にはノリの不足が深刻になり、もう一度呼びかけた。特にノリウツギは夏に腐敗しやすいので紙が漉けなくなっている。今このアオギリを栽培しようという考えを持たないのは勸業に熱心な人とは言えないと少し強く訴えている。

「日本製紙論」にも中国名の梧桐として特徴が説明されている。これは田畑の岸に植えて十分に育つ。ノリにはこの根を使うが、周囲十五丈、長さ三十丈のもので半紙二十束が漉けるとい

う具体的な目安も示している。同三十一(一八九八)年にはさらに新しい草を見つけた。愛媛県宇摩郡に自生しているもので、当初名前がわからず「草糊」と言われていた。県内ではまだ見つかっていないかった。これを使えば、ノリにかかるお金が、ノリウツギを使う時の四分の一ほどで済むという計算もできた。

源太はこの名前を知りた

(京大大学院研修員、京都府在住)